



ごん^{ぎつね}狐

新美南吉



青空文庫



青空
文庫

これは、私がわたし小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山なかやまというところに小さなお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

1 ぎつね ごん 狐
その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん ぎつね 狐」という狐がいました。ごんは、一人ひとりぼっちの小狐で、し

だの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手ひやくしやうやにつるしてあるとんがらしをむしりとつて、いったり、いろんなことをしました。

あるあき或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間あいだ、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしやがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはい出ま

した。空はからつと晴れていて、百舌鳥もずの声がきんきん、ひびいていました。

こんは、村の小川おがわの堤つつみまで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少すくないのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩はぎの株が、黄いろくにゴつた水に横だおしになつて、もまれていきます。ごんは川下かわしもの方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。

ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十ひょうじゅうだな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶつていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子ほくろみたいにへばりついでいました。

しばらくすると、兵十は、はりきり、網の一ばんうしろの、袋のようになったところを、水の中からもちあ

げました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふという、なぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみとしよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼつて、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上りあがびくを土手どてにおいといて、何をさがしにか、川上かわかみの方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり、網のかかっているところより下手しもての川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなつて、頭をびくの中

につつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言つてごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びつくりしてとびあがりました。うなぎをふりすててにげようとしましたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しようけんめいに、にげていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえつて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほつとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして穴のそとの、草の葉の上のにせておきました。

十日ほどたつて、ごんが、弥助やすけというお百姓の家の

裏を通りかかりますと、そこの、いちじくの木のかげで、弥助の家内かないが、おはぐろをつけていました。

鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそう

なものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやつて来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢おおぜいの人があつまっています。よそいきの着物を着て、腰に手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えています。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだらう」

お午ひるがすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、

ろくじぞう

六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、

やねがわら

遠く向うには、お城の屋根瓦が光つています。墓地に

ぼな

は、ひがん花がが、赤い布きれのようにさきつづいていまし

かね

た。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かが鳴つて

あいず

来ました。葬式あいずの出る合図あです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやつて来

はなしごえ

るのがちらちら見えはじめました。話声はなしごえも近くなりま

11 ごん狐

した。葬列は墓地へはいつて来ました。人々が通つた

あとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたい元気の良い顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母かあだ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり、網をも

ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとつて来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよッ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

三

兵十が、赤い井戸のところ、麦をといでいました。兵十は今まで、おつ母と二人ふたりきりで、貧しいくらしをしてきたもので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼつちでした。

「おれと同じ一人ぼつちの兵十か」

こちらものおきの物置うしろの後から見ていたごんは、そう思いました。

しました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へい
わしを投げこんで、穴へ向むかつてかけもどりました。途
中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井
戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいこと
をしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗くりをどつきりひろつて、
それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からの
ぞいて見ますと、兵十は、午飯ひるめしをたべかけて、茶碗ちやわんを
もったまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんな

ことには兵十の頬ほっぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「ただいだが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだらう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われ、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまつたと思ひました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわつてその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろつては、兵十の家へもつて来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもつていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通つてすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

19 ぎつね こん狐
ごんは、道の片がわにかくれて、じつとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と

加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」
「何が？」

「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに粟
やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだ
よ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おい

ていくんだ」

ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまつて歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。ごんはびくつとして、小さくなつてたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつきとあるきました。

吉兵衛というお百姓の家まで来ると、二人はそこへは
いつていきました。ポンポンポンと木魚もくぎよの音がし
ています。窓の障子しょうじにあかりがさして、大きな
坊主頭ぼうずあたまがうつつて動いていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそば
にしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほ
ど、人がつれだつて吉兵衛の家へはいつていきました。
お経を読む声がきこえて来ました。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしやがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえつていきます。ごんは、二人の話をきこうと思つて、ついでいきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみいきました。お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

23 ごん狐「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやつて、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、まいにち神さまにお礼を言う方がいいよ」

「うん」

こんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。
おれが、栗や松たけを持って行ってやるのに、そのお
れにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじや
ア、おれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗をもつて、兵十の家へ出
かけました。兵十は物置で縄なわをなっていました。それ
でごんは家の裏口から、こつそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の
中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬ
すみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来
たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火繩銃ひなわじゆうをとつて、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ぱたりとたおれました。兵十はかけよつて来ました。家中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

27 28 ぎつね 狐
「おや」と兵十は、びつくりしてごんに目を落しました。「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきま
した。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙
が、まだ筒口つづぐちから細く出ていました。



ごん狐^{ぎつね}

新美南吉 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

1997（平成9）年7月15日発行第2刷

※ 入力時に使われた底本が不明とのことなので、表記は岩波文庫版に合わせた。

入力：林裕司

校正：浜野智

1998年10月23日公開

2004年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ